

令和3年 8月3日	農作物病害虫発生予報 8月	山口県病害虫防除所 山口県農林総合技術センター
--------------	--------------------------------	----------------------------

～目 次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病害虫】	2
	【その他の病害虫】	16
III	参考(予報の見方、気象予報)	17

I 予報の概要

農作物名	病害虫名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イネ	いもち病(穂いもち)	やや多	—	—
	紋枯病	平年並	平年並	多
	セジロウンカ	やや少	少	少
	トビイロウンカ	平年並	平年並	少
	コブノメイガ	やや少	やや少	少
	斑点米カメムシ類	多	多	多
ダイズ	ハスモンヨトウ	平年並	平年並	少
カンキツ	かいよう病	平年並	平年並	前年並
	黒点病	少	少	少
	ミカンハダニ	平年並	平年並	多
ナシ	黒斑病	少	少	少
	黒星病	やや多	やや多	前年並
	ハダニ類	多	多	多
果樹全般(モモ、ナシ、リンゴ)	カメムシ類(チャバネカメムシ、ツヤカメムシ、クサギカメムシ)	やや少	やや少	少

お問い合わせ先

TEL (083) 927-4006

FAX (083) 927-0214

E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

イネ

1 いもち病（穂いもち）

(1) 予報内容

予想発生量	防除時期
やや多	粉剤・液剤：穂ばらみ後期と穂揃期の2回 粒剤・パック剤：出穂前

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、葉いもちの発生ほ場率26.7%（平年19.6%）、発病株率11.2%（平年7.4%）、発病度2.8（平年2.0）で平年に比べやや多かった（+）。

イ 7月下旬の巡回調査における病斑の最上位葉は2.7葉（平年2.7葉）であった（±）。

ウ 気象予報では、8月の気温、降水量、日照時間はほぼ平年並み（±）。

(3) 防除対策

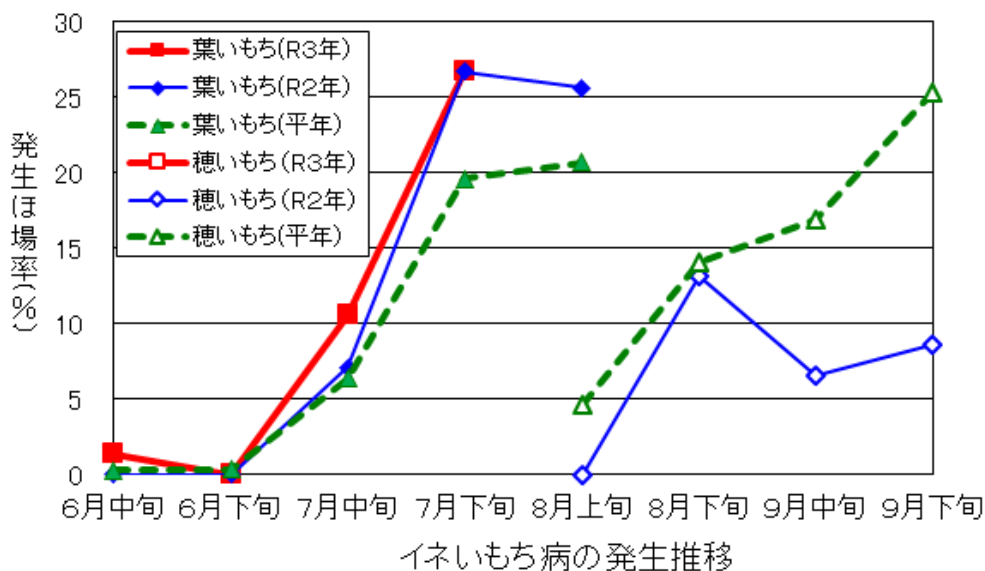
<耕種的防除>

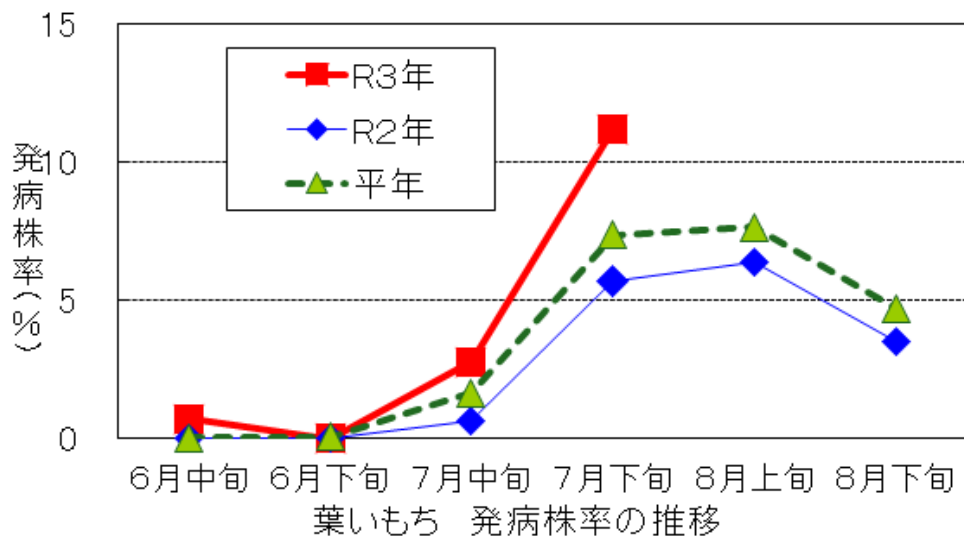
窒素肥料の多用は避ける。

<防除のポイント>

ア 葉いもちが発生しているほ場は、直ちに防除を行う。また、穂いもちの防除予定日まで7日以上ある場合（止葉抽出前）は、葉いもちの防除を行い、その後、穂いもちの防除を実施する。

イ 穂いもちの防除を適期に実施する。粉剤・液剤は穂ばらみ後期及び穂揃期の2回行い、粒剤・パック剤は出穂前に施用する。





2 紋枯病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	多	粉剤・液剤：穂ばらみ期（出穂14日前頃） 粒剤：出穂30日～10日前

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率2.3%（平年3.1%）、発病株率0.2%（平年0.3%）、発病度0.1（平年0.1）で平年並みであった（±）。

イ 気象予報では、8月の気温、降水量、日照時間はほぼ平年並み（±）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

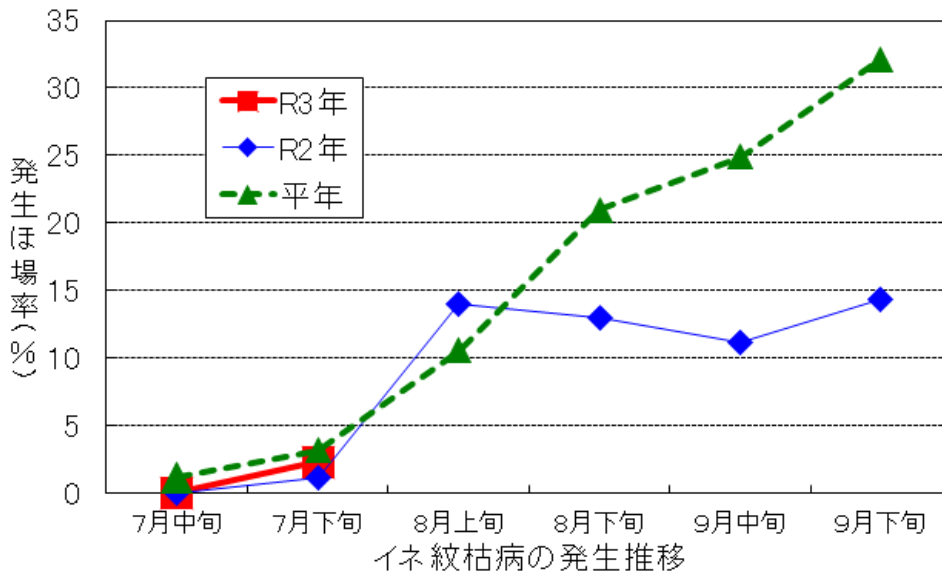
窒素肥料の多用は避ける。

<防除判断>

防除の目安は、穂ばらみ中期（出穂14日前頃）に発病株率が15～20%以上の場合に防除する。

<防除のポイント>

出穂期を過ぎると薬剤散布の効果が劣るので、適期防除に努める。また、株元まで十分に薬剤がかかるよう、ていねいに散布する。



3 セジロウンカ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	少	少	株当たり成幼虫50頭以上

(2) 予報の根拠

ア 予察灯での誘殺数（4か所、5月11日～7月26日）は、72頭（平年109頭）で平年並みであった（±）。

イ 下旬の巡回調査では、発生ほ場率17.4%（平年72.3%）、10株当たり虫数0.7頭（平年22.6頭）で平年に比べ少なかった（-）。

ウ 気象予報では、8月の気温、降水量はほぼ平年並み（±）。

(3) 防除対策

<防除判断>

穂ばらみ中期までに株当たり50頭以上（成幼虫）の多発生があれば、褐変穂を生じる可能性があるため薬剤防除を行う。

<防除のポイント>

ア 飼料用米では多発する場合がありますので注意する。

イ 出穂した後のほ場では、防除の必要性は低い。

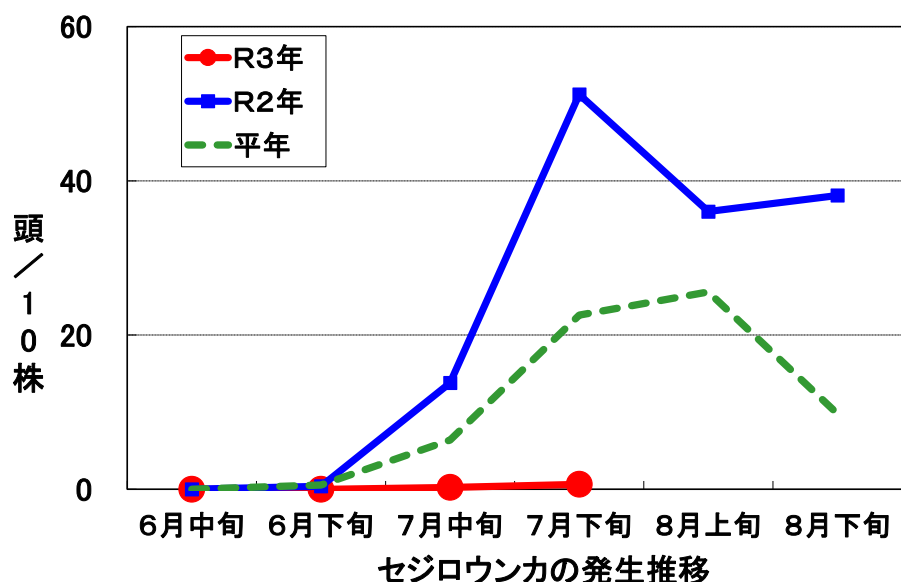
セジロウンカ

JPPネット有効積算温度シミュレーション

		8月					
飛来日	飛来量	5	10	15	20	25	30
7月1日	少	卵	第2世代幼虫	第2世代成虫	卵		
7月9日	並	第1世代成虫	卵	第2世代幼虫	第2世代成虫		

7月15日現在

セジロウンカの防除適期予測図



4 トビイロウンカ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	8月上旬までは成幼虫100株当たり20頭以上 8月中旬以降は株当たり成幼虫5頭以上

(2) 予報の根拠

ア 予察灯での誘殺数（4か所、5月11日～7月26日）は、0頭（平年2.8頭）で平年並みであった（±）。

イ 下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%（平年7.8%）、10株当たり虫数0頭（平年0.2頭）で平年並みであった（±）。

ウ 気象予報では、8月の気温、降水量はほぼ平年並み（±）。

(3) 防除対策

<防除判断>

ア ほ場の発生状況を確認し、防除の目安を超えていた場合は直ちに防除する。

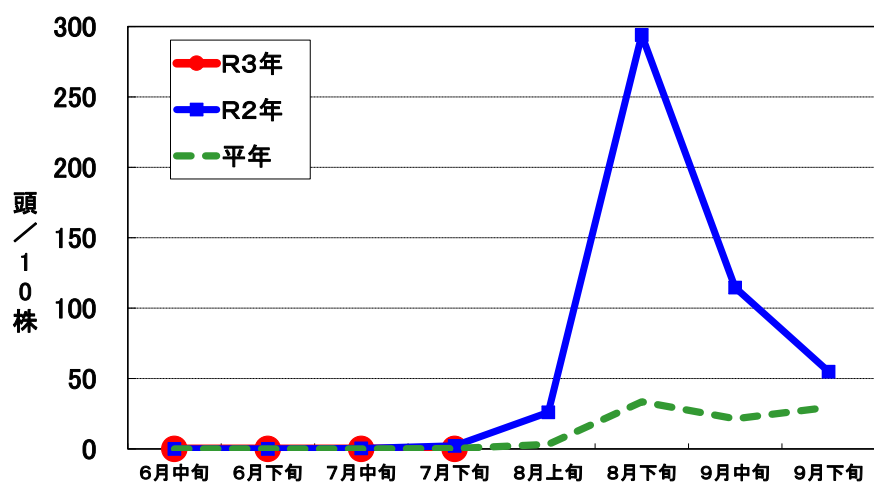
イ 防除の目安は、8月上旬までは成幼虫100株当たり20頭以上、8月中旬～9月上旬は株当たり成幼虫5頭以上である。

エ ほ場を確認する際には、ヒメトビウンカの幼虫と見誤らないようにする。

<防除のポイント>

ア 長期持続型箱施用剤を施用したほ場でも発生状況をよく確認する。

イ 薬剤が株元にかかるように、丁寧に散布する。



トビイロウンカの発生推移

<参考>



トビイロウンカ短翅成虫



トビイロウンカ幼虫



ヒメトビウンカ幼虫

5 コブノメイガ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	成虫の払い出しで1㎡当たり5頭以上

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップでの誘殺数（山口市、6月6日～7月30日）は、4頭（平年58頭）で平年に比べやや少なかった（－）。

イ 下旬の巡回調査では、発生ほ場率2.3%（平年22.7%）、被害株率0.1%（平年4.7%）、被害葉率0.0%（平年0.2%）、20回払い出し虫数は0.0頭（平年0.9頭）で平年に比べやや少なかった（－）。

ウ 気象予報では、8月の気温、降水量はほぼ平年並み（±）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

葉色の濃いイネに好んで飛来するため多肥を避ける。

<防除判断>

ア 成虫の払い出し調査で5頭/㎡以上であれば粉剤は7日後に、粒剤は直ちに散布する。

イ 減収が問題となるのは、出穂期に上位2葉の被害葉率が15%（株率80%程度に相当）以上とされている。

<防除のポイント>

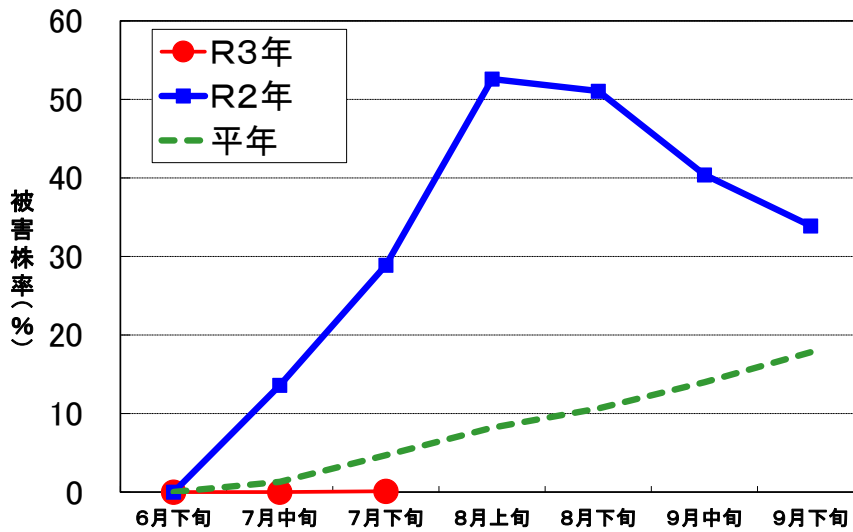
粒剤で防除を行う場合の防除適期は、成虫最盛期なので遅れないようにする。

コブノメイガ JPPネット有効積算温度シミュレーション

		8月					
飛来日	飛来量	5	10	15	20	25	30
7月12日	少					防除適期	
		第1世代蛹		第1世代成虫	卵	第2世代幼虫	

7月14日現在

コブノメイガの防除適期予測図



コブノメイガによる被害株の発生推移

6 斑点米カメムシ類

令和3年8月3日付け令和3年度農作物病害虫発生予察注意報第1号

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	出穂期7日前と穂揃期の2回防除を徹底する (粉剤または液剤の場合)

(2) 予報の根拠

ア 予察灯での誘殺数（4か所、6月25日～7月26日）は、1,877頭（平年920頭）で過去10年で最も多く、特にイネカメムシ、アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメが多かった(表)。

イ 下旬の雑草地20回すくい取り調査では、232頭（平年121頭）で平年に比べ多く、特にアカスジカスミカメが多かった(図)。

ウ 気象予報では、8月の気温、降水量はほぼ平年並み（±）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

カメムシ類が増えるのを避けるため、出穂2週間前までに畦畔等の草刈りを実施し、それ以降もイネ科雑草（エノコログサ、メヒシバ、ヒエ等）の穂が出ないように管理するとより効果的である。なお、イネカメムシはイネ科雑草に寄生しないため、畦畔の草刈りを行ったほ場でも多発する場合があるため注意が必要。

<防除のポイント>

ア 薬剤防除（粉剤、液剤）は、出穂期の7日前と穂揃期の散布を徹底する。

イ 粒剤で防除を行う場合は、粉剤、液剤より3～4日早く散布する。

粒剤はイネカメムシ等の大型カメムシに対しては効果が劣ることがあるため、注意する。

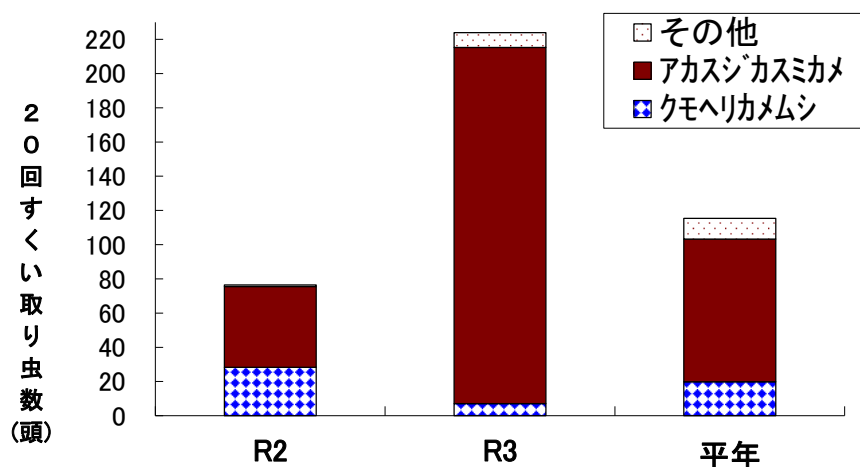
ウ ほ場での発生状況を確認し、防除後もカメムシ類の発生が認められる場合は、さらに7日後の追加防除を実施する。

エ 防除薬剤は令和3年山口県農作物病害虫・雑草防除指導基準による。

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a17201/nougyou/shigen/002mokuji.html>)

表 予察灯における斑点米カメムシ類誘殺数(6月26日～7月25日;県内4か所合計)

年度	種類別誘殺数(頭)					合計
	イネカメムシ	アカスジカスミカメ	アカヒゲホソミドリカスミカメ	ミナミアオカメムシ	クモヘリカメムシ	
令和3年	90	1577	196	5	9	1877
平年	9	776	109	13	13	920



雑草地における斑点米カメムシ類の発生状況（すくい取り調査：7月下旬）



写真1
イネカメムシ成虫
(体長16mm程度)



写真2
アカスジカスミカメ成虫
(体長5~6mm)



写真3
アカヒゲホソミドリ
カスミカメ成虫
(体長5~6mm)

ダイズ

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	若令幼虫最盛期 (9月中下旬)

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップでの誘殺数 (山口市、7月) は、879頭(平年1,166頭)で平年並みであった (±)。

イ フェロモントラップでの誘殺数 (5か所、6月21日~7月20日) は、2,121頭(平年2,718頭)で平年並みであった (±)。

ウ 気象予報では、8月の気温、降水量はほぼ平年並み (±)。

(3) 防除対策

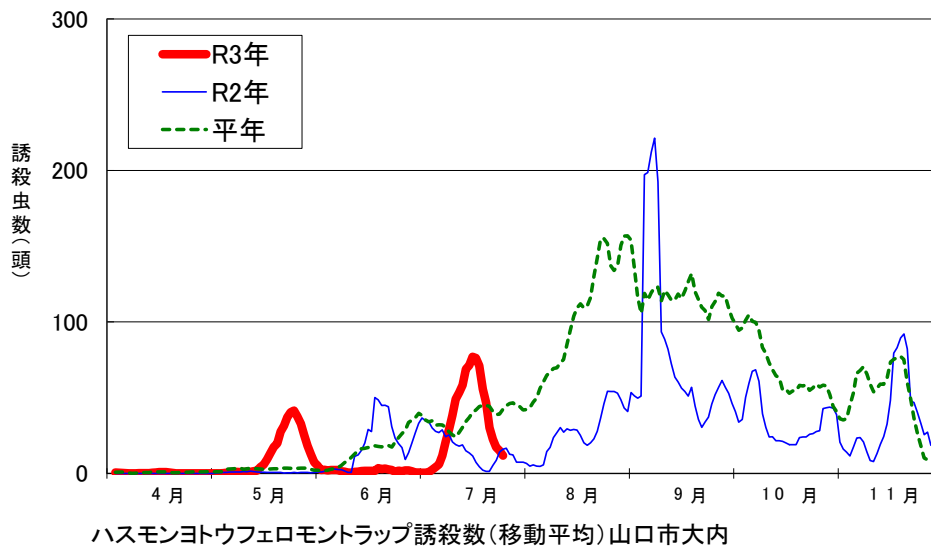
<防除判断>

防除の目安は、白変葉の発生か所数が1アール当たり5か所以上である。

<防除のポイント>

ア 中~老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、若齢幼虫期の防除を徹底する。

イ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。



ダイズ白変葉



ハスモンヨトウ (卵+若齢幼虫)



ハスモンヨトウ (老齢幼虫)

カンキツ

1 かいよう病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	台風の襲来前

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率10.5%(平年11.0%)、発病果率0.7%(平年0.8%)、発病度1.4(平年0.3)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、8月の降水量はほぼ平年並み(±)。

(3) 防除対策

<防除判断>

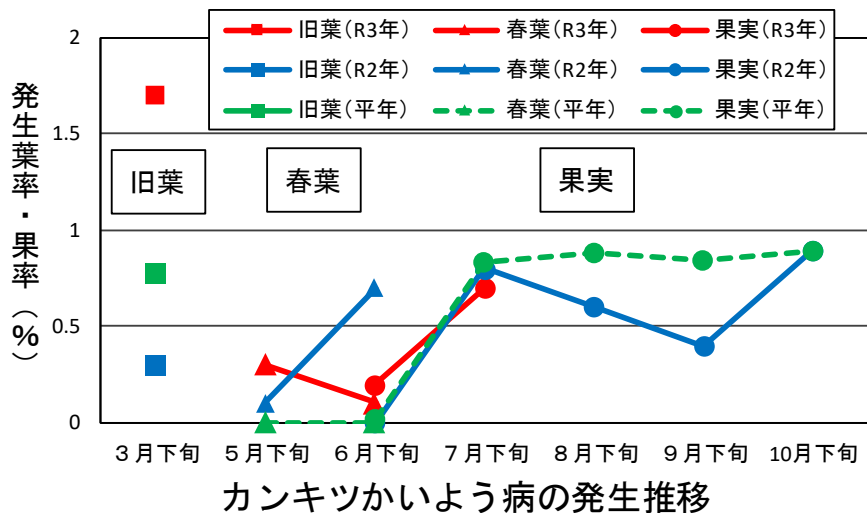
発生が見られるほ場や、あまなつ、いよかん等発病しやすい品種では、台風の襲来前に防除を実施する。

<防除のポイント>

ア 病斑のある枝や葉は伝染源となるので除去する。

イ 防風樹や防風ネットを整備し、強風による感染を防ぐ。

ウ 夏秋梢はミカンハモグリガの被害が発生しやすく、本病の発生を助長するのでできる限り除去する。幼木や隔年交互結実園の遊休樹など夏秋梢を残す場合にはミカンハモグリガの防除を徹底する。



2 黒点病

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	少	防除後の累積降水量が200~250mmに達したとき、または、薬剤散布後1か月を経過したとき

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率36.8%(平年73.0%)、発病果率6.0%(平年16.4%)、発病度1.2(平年3.9)で平年に比べ少なかった(-)。

イ 気象予報では、8月の降水量はほぼ平年並み(±)。

(3) 防除対策

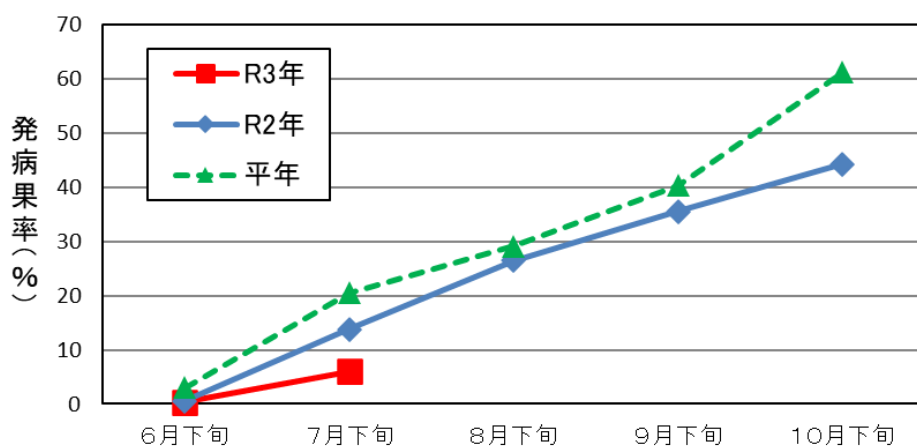
<防除判断>

予防散布が基本なので、予報内容の防除時期に合わせて防除を実施する。

<防除のポイント>

ア 樹冠内の枯れ枝や放置された剪定枝は本病の伝染源となるので、園外に持ち出して処分する。

イ 「せとみ」の黒点病は病斑が大きくなり、外観品質に及ぼす影響が大きいので、防除が遅れないように留意する。



カンキツ黒点病の発生推移

3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	並	多	防除の目安を超えたとき 雌成虫の寄生葉率30~40%以上 または雌成虫1葉当たり0.5~1頭以上

(2) 予報の根拠

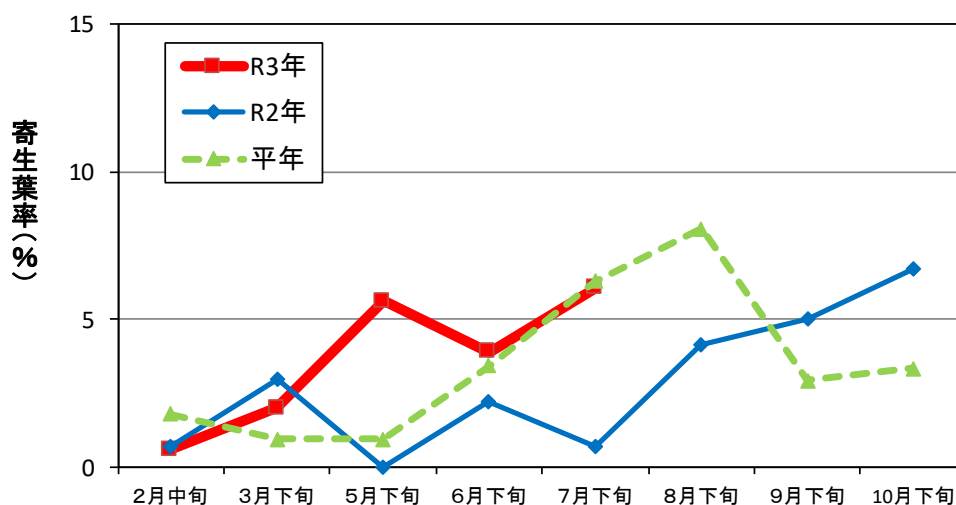
ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率26.3%(平年33.0%)、寄生葉率6.1%(平年6.3%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、8月の気温、降水量はほぼ平年並み(±)

(3) 防除対策

<防除のポイント>

発生量はほ場によって大きく異なる。定期的にはほ場を見回り、発生状況を確認する。



ミカンハダニの発生推移

ナ シ

1 黒斑病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	少	8月に2～3回の薬剤防除を行う。

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%(平年44.6%)、発病葉率0%(平年0.1%)、発病新梢率0%(平年3.4%)で平年で平年に比べ少なかった(－)。

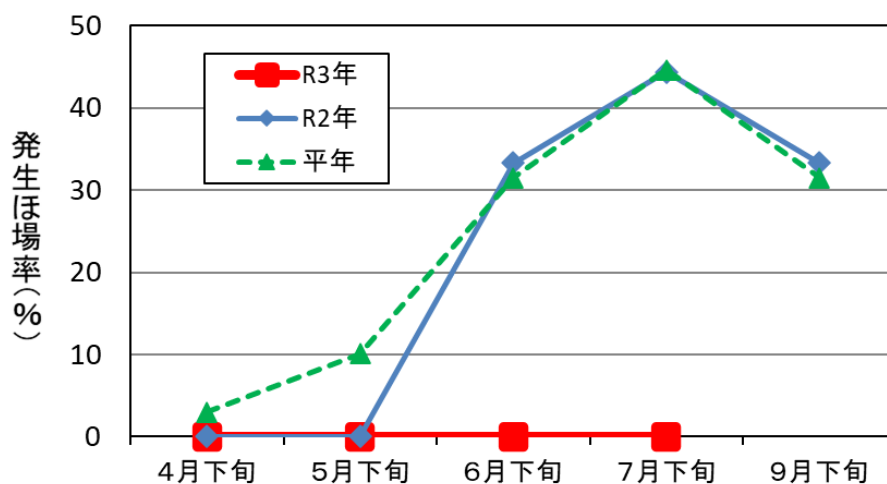
イ 気象予報では、8月の降水量はほぼ平年並み(±)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 薬液が新梢の先端まで十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 落下した果実は拾い集め、園外に持ち出し処分する。



ナシ黒斑病の発生推移

2 黒星病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	前年並	黒斑病、輪紋病と同時防除を行う。

(2) 予報の根拠

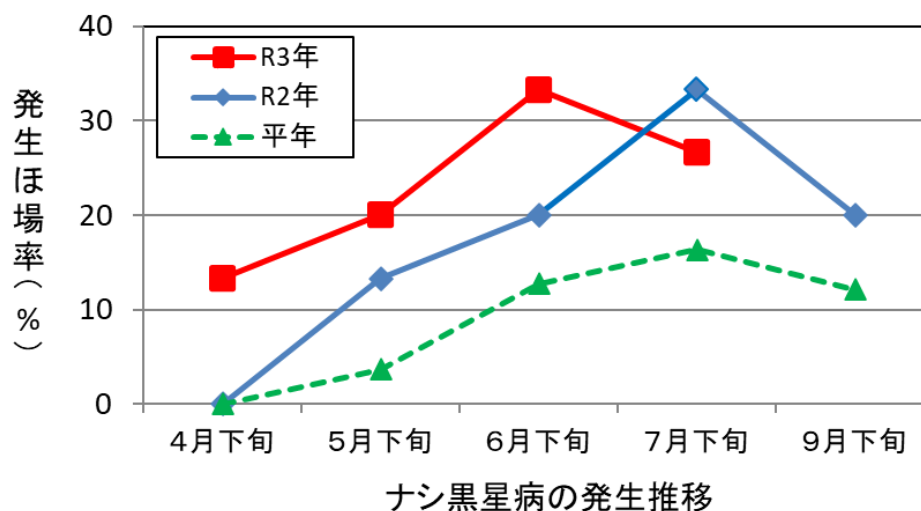
ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率26.7%(平年16.4%)、発病葉率1.0%(平年0.5%)で平年に比べやや多かった(+)

イ 気象予報では、8月の降水量はほぼ平年並み(±)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

- ア 発病した果実や葉は伝染源になるので、見つけ次第除去するとともに、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。
- イ 本病が発生している場合は、治療効果があるストロビルリン剤（ストロビー、アミスター等）、アミド系剤（フルーツセイバー、アフェット等）で直ちに防除を実施する。
- ウ 薬剤が果実と新梢にかかるよう、丁寧に散布する。
- エ 薬剤耐性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。
- オ ベンレート剤、ルビゲン剤では耐性菌が出現しているので、防除の後必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は、他剤を使用する。



3 ハダニ類（カンザワハダニ、ナミハダニ）

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	発生初期

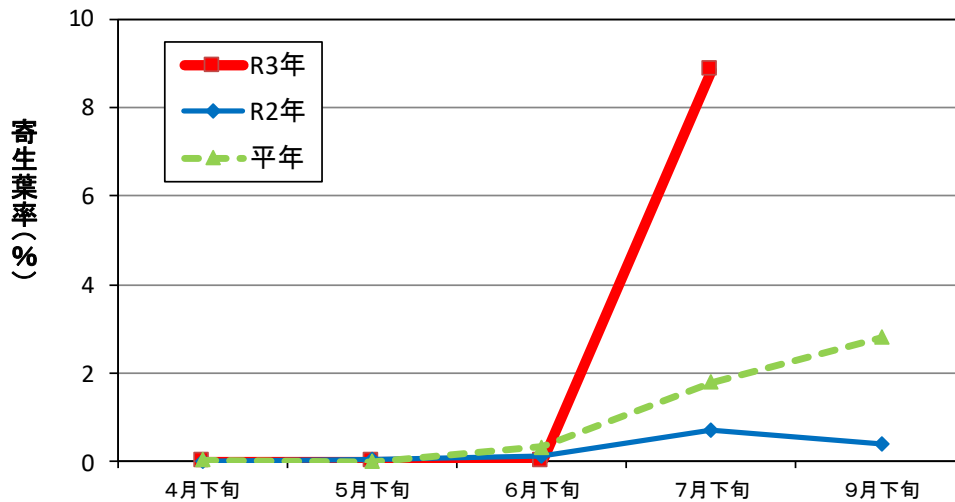
(2) 予報の根拠

- ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率40.0%（平年12.7%）、寄生葉率8.8%（平年1.8%）で平年に比べ多かった（+）。
- イ 気象予報では、8月の降水量はほぼ平年並み（±）。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

- ア 乾燥期にハダニ類が多発すると早生種では葉焼けが助長され、早期の落葉を招くので、防除を徹底する。
- イ 薬剤防除の際は収穫前日数に注意の上、かけむらがないよう十分な量で丁寧に散布する。



ナシハダニ類の発生推移

果樹全般 (モモ、ナシ、リンゴ)

1 カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ)

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	園地への飛来を確認した時

(2) 予報の根拠

ア 予察灯での誘殺数(5か所、6月26日～7月25日合計)は、49頭(平年261頭)で平年に比べやや少なかった(－)。

イ フェロモントラップでのチャバネアオカメムシの誘殺数(4か所、6月26日～7月25日)は、88頭(平年6,400頭)で平年に比べやや少なかった(－)。

ウ スギ・ヒノキの毬果量調査(6か所、6月下旬調査)では、スギ、ヒノキとも平年並みの着果程度であった(±)。

(3) 防除対策

<防除判断>

園地内への飛来を確認したらすぐに薬剤散布を行う。ライトトラップ※を利用すると飛来を確認しやすい。

※園地内ライトトラップによる防除判断マニュアルは山口県病害虫防除所ホームページ

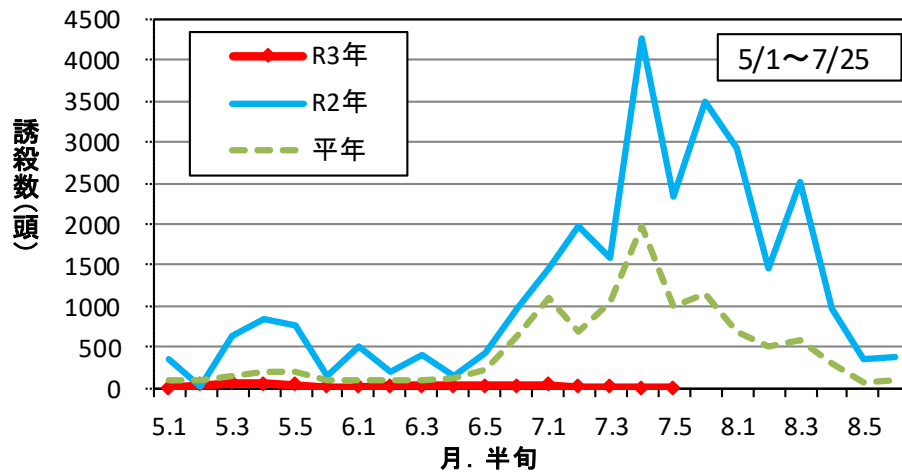
「主な病害虫の発生生態と防除対策資料」に掲載している。今後の発生予察情報に注意する。

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a17201/nougyou/shigen/hatuseiseitai.html>

<防除のポイント>

ア 有袋栽培であっても、果実肥大により果実が袋に接した時期に加害されるので注意する。

イ カメムシ類に対する薬剤散布によって、ハダニが増殖する可能性があるため、発生状況に注意する。



フェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシの誘殺数
(県内4か所合計)

【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想発生量	現況		発生ほ場率(%)		備考
			平年比	前年比	本年	平年	
イネ	イチモンジセセリ	平年並	平年並	前年並	1.2	4.4	6月以降に移植した作型で、葉色の濃いほ場は被害を受けやすい。長期持続型箱施用剤を施用したほ場では防除の必要性は低い。
	ニカメイガ	平年並	平年並	前年並	0	0	チョウ目害虫に効果のある長期持続型箱施用剤を利用している場合は追加防除は必要ない。
ダイズ	吸実性カメムシ類	やや少	やや少	少	—	—	
カンキツ	そうか病	平年並	平年並	少	0	4.5	病斑のある枝や葉は除去する。
	ミカンサビダニ	平年並	平年並	前年並	0	0.5	
	チャノキイロアザミウマ	平年並	平年並	少	0	14.0	

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 病虫害発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

早 い	過去10年間の平均値より6日以上早い
遅 い	〃 より6日以上遅い
やや早い	〃 より3～5日早い
やや遅い	〃 より3～5日遅い
平年並	〃 を中心として前後2日以内

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1か月気象予報（7月29日福岡管区气象台発表）

予 報	低 い (%) 少ない	平年並 (%)	高 い (%) 多 い
気 温	30	30	40
降 水 量	40	30	30
日照時間	30	30	40

週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	50	50	10
2 週 目	20	40	40
3～4 週目	20	30	50